

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

第29号 1998年10月1日

ゴキとゴゼ

吉村 淑甫

「ごきぶり」の虫名は漢字で「蜚蠊」と書いてある。「網翅目ゴキブリ科の昆虫」だそうだ。ごきぶりの呼称は御器囃(みぎはら)から轉じた言葉で、御器すなわち椀類(木地挽細工)を囀る虫ということらしい。大分や和歌山辺りではゴキカブリ、ゴキコブリ、ワンカブリなどと呼ぶとのこと。

土佐でも木地挽椀の称をゴキと呼んだが、ごきぶりという云い方は無かったようだ。土居重俊さんの土佐方言辞典にも「ごぜ」「ごぜむし」は出てくるが「ごきぶり」は出ていない。土佐で「ごきぶり」を思いだしたのはどうも近頃のことらしい。

本来、ゴキは轆轤(うくろ)で木を削って造ったものの総称で、一般に飯椀を指したそうだ。香美郡北部、物部川沿いの村々でもかつてゴキの呼称があった。私も少年時代までこの地方で育ったが、私の知っているゴキは椀類のなかでも木の深い大皿(径二十cm余)を指していた。すでに汁椀の類は漆器になっていて、これをゴキとは呼ばなかった。方言辞典にはゴキは犬、猫の食用皿と出ている。これは奈良県葛城郡や佐渡

ヶ島でもそのように呼んでいたらしい。ところが、私の家などではゴキと云えば、もっぱら米櫃の中にあつて米を掬う木の太皿椀を指していた。処により人によってゴキの用途も違っていたということだろう。

少年時代、生家の近くに、タケ男さんとキミやんの夫婦が住んでいた。タケ男さんの家は明石掃門守を先祖に持つ家の分家筋である。主屋の裏口にあたる辺りに掃門守の跡どころの碑が建っていた。妻のキミやんは永野と呼ぶ小邑の、屋号ホキという家から嫁いできた。二人は結婚して十幾年経つのに子に恵まれなかった。キミやんは当時の女としては大柄だった。大柄ゆえに子が無い、などとブシツケ(失礼)なことを云う人さえいた。子が無かったゆえか、キミやんは子供好きで、近隣の子供たちを可愛がった。

明石の家の倉のある前庭の端に古い杏子の木があつて、大きい枝が石畳の坂道の上に差出していた。その下を上げていて門を入り、広庭を横切り主家の縁側にたどりつく。広庭といつても百姓家の作業庭で、田舎では庭とは呼

ばないでどこでも坪(坪)といった。縁側に腰かけて待つっていると、やがてキミやんがゴキの大皿の中に焼けてめくれあがつた何枚かの氷餅(かき餅)を持って奥から出てくる。飴色をした氷餅の焼けた香りがキミやんと一緒に匂ってきた。春先の縁側で氷餅を頬張る時の心地よさを子供たちはいつまでも忘れなかった。

キミやんの話は付け足して恐縮だが、つまりここではキミやんはゴキの大皿を菓子盆替りに用いていたというわけだ。洗い晒されたやわらかな木地膚を見せたゴキを今でも思い出す。

話は元へ戻るが、ゴキブリを土佐では何故、ゴゼ、ないしゴゼムシと呼ぶのだろう。一般の辞典類にもゴゼは土佐に限ると出てくる。理由は記していない。何故、ゴキブリがゴゼムシだろう。昔、誰かにその理由を聞いたような覚えがあるが、今ではすっかり亡失してしまっている。

土佐方言辞典の「ごぜ」の項の次に「ごぜいざり」という項目が出ている。曰く「端座して、両足の間へ腰部をべたんと落としてすわる坐り方(女性のすわり方)」と。ゴキブリとの関係はわからぬが面白い。ゴキのあった生活も、ゴゼ(瞽女)さんの人生も、もはや遠い日の語り草になってしまった。

(当館館長)

企画展

『昔のくらしと道具』

— 大津民具館の資料から —

梅野光興

大盛況だった「からくり」展に続いて、秋の歴史館の企画展は、高知市の大津民具館の資料をお借りして行なう「昔のくらしと道具—大津民具館の資料から—」です。大津民具館って何？なぜ展示をやるの？という疑問をお持ちの方もおられると思いますので、ま

— 大津民具館の誕生 —

大津民具館ができたのは、昭和四十一年十一月一日、今からちょうど三十二年前のことです。その頃、高知市大津はまだ長岡郡大津村と呼ばれており、高知市と合併しておりませんでした。高知市郊外に位置する大津は次第に宅地化が始まり、生活様式も変化し始めた頃でした。

その頃の村長である徳弘勝氏を中心に、これまでの自分たちの生活のあかしである民具を残そうという動きが起りました。そして、現在民具館のある岩崎山に民具館を作ることに村議会で決定しました。徳弘村長をはじめ、

村民の人の協力で多くの民具が集まりました。

この民具館の特徴は、最初「土佐民具館」と称されていたことでしょう。

「土佐民具館」は、すなわち高知県全体の民具を集めた資料館です。ですから遠く東津野村や大正町からも資料が集められました。当時において、県立の資料館がもつような構想を既にもっていたのです。私たちの高知県立歴史民俗資料館ができたのが、大津民具館ができて二十五年もたつてからのこと



大津民具館

です。いかに大津民具館が早い時期に高い志をもったものであったかが伺えます。実際に大津のものとそれ以外の資料の比率は半々くらいでしょうか。

— 大津民具館の再調査 —

大津民具館には、この三十年の間に、昔のくらしを勉強しようという小学生をはじめ多くの見学者が訪れています。ですが、常駐の職員がいなかったため（見学には市の教育委員会へ申し込みが必要です）、三十年もの歳月がたつうちに、資料からラベルがはずれたりして資料と台帳が一致しないものが出てきました。また、説明の紙も失われ、それが何の資料なのかわからないものもあります。

その様子を見た大津の人の一部から、大津民具館をもう一度整理して、みんなに見てもらおうという話が出て来ました。

そこで、話を聞いた高知市教育委員会社会教育課の横山沙知さんが、それならということで、私どもの歴史民俗資料館に相談をもってこられました。



ボランティアで民具の調査をした
大津の女性たちと市社会教育課の依光桃子さん
(左から2人目)

最初に担当だった当館の中村淳子は、まず資料ごとのカードを作り、それを新しい台帳にしようと提案しました。その考えのもとに、大津の女性たちを中心に、民具を一点一点洗い、スケッチをとり、大きさを測り、写真を撮影し、カードを作るといふ作業を始めました。この作業は意外と長くかかりました。しかし地道に続けたおかげで、おおよそ五〇〇点ほどの資料カードができました。

次は実際に民具がどのように使われていたのか、聞き取りを始めることになりました。ところが当時民具を寄贈された方の多くが、既に亡くなられていました。そこで、視点を変えて、もとの持ち主でなくても、昔の暮らしを知る方に話を聞いていくことにしました。すると、そこで聞いた話は、まっ

たく今の天津とは違う所のことのように、驚くことばかりでした。

舟入川をめぐる生活

私たちの知る現在の天津は、住宅がびっしり建て込み、天津バイパスが横断し、大きな店がいっぱい並んでいる市街地です。ところが、このようになってしたのは、まだここ三十年ほどのことになり過ぎなかつたのです。

昭和三十年代には、天津小学校から

田辺島集落の間には、田んぼしか無かつたということですが、ですから、学校から子供が帰っている様子がよく見えた、ということでした。これは、鹿児、舟戸、北浦、関、長崎といったほかの集落でも同じことです。

天津村の中央を流れていた舟入川は、今でこそ排水路のような姿に変貌していますが、かつては、交通の大動脈でした。物部川の上流から切り出されてきた材木がイカダに組まれて、舟入川

を流れていました。まだイカダに乗って遊んだ覚えのある人がいっぱいいます。また、収穫した米を積んで、高知市内へ移送するのはもちろん、田んぼで刈り取った稲を家へ持って行くのにも舟を使っていました。農閑期になると、好きな人は網舟に乗って、浦戸湾に漁をしに行くのでした。浦戸湾まで行かなくても、舟入川ではウナギなどいろいろな魚、蟹、貝が取れ、食卓をにぎわしました。

子供たちの夏の遊び場もこの川でした。泳いだり魚を取ったり、遊ぶことはいくらでもありました。また、舟入川に面した家には、クミジと呼ばれる石段があつて、家の主婦が洗濯のすそぎをしていたそうです。それだけきれいな流れだったので。

もちろん、天津には明治四十四年から路面電車が走っていたので、人が高知に行くときは電車を利用することが多かつたのですが、大量の物を運送するには、川は重要な道だったので。それが昭和三十年代くらいから、クルマへのウェイトが大きくなるにつれて、人々の視界から舟入川は消えて行きます。かつては表通りだった舟入川が裏側の排水路のようになってしまったのです。



アイロン（上）炭火を入れて使った。
祝酒樽（下）祝事の時、酒屋が貸した。



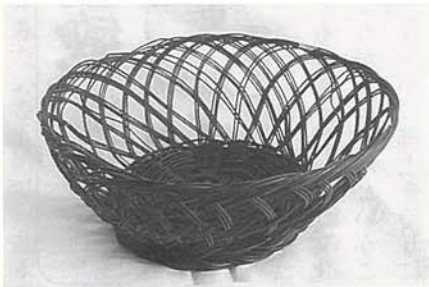
めこ（左下）洗った食器を入れた。



羽子板



うなぎばさみ



を伝える資料も展示しようと思つています。

今回の展示について

これまで、歴史館では、山村や海、そして川漁の文化を紹介してきました。今回は、高知市内にあるひとつの村でも、いろいろ興味深い、面白いことがある、という点をご紹介します。この何十年かの都市化、宅地化は本当に激しいものです。ついこの間までは田んぼだった所にあつと言う間に家やマンションが立ち並び、今は山も住宅団地になっています。そんな中で急速にかつての生活のことは失われていこうとしています。今回は、そのような見地から、地元の方が調査活動を通じてきた天津に焦点を絞り、かつての生活を少し探ってみようと思ひます。それは、天津や高知市に限らず、私達が知っている昔のくらしだと思います。

展示室には、天津民具館に集められた数多くの資料を「火の昔」「飯と酒」「紅と紺」などのテーマに分けて展示します。また、この夏休み、子供たちがお母さんと力を合わせて作った天津の舟戸付近の模型も展示します。

民具に通ずるような手作りの展示になると思いますが、ぜひ多くの人に見て頂ければ幸いです。

上田 茂敏さん

上田茂敏氏（大正十年生まれ）には、開館前から資料調査員としてお世話になってきました。当館の屋外展示民家、東津野村北川の味元家住宅をさがし出して下さったのも上田氏でした。草

きの山道を登ってはじめて味元家を訪ねたとき、村人総出の茅普請のことを御当主と一緒に話して下さったことが印象深くに残っています。

上田氏は昭和五十九年に東津野村教育長を退職されましたが、その後も引き続き郷土の歴史を探究されています。上田氏の大きな仕事と言え、何といっても『東津野村史』でしょう。ですから、まずはそこからお話しをうかがってゆくことにしましょう。



上田茂敏氏

『東津野村史』の
編纂に携わって

山奥だけれども、東津野村には文化的に優れたところがあるんだということを知らせて、青少年に郷土を誇りに思ってもらいたいということが、村史を作る上での願いでした。

私は戦後復員してしばらくは百姓をしておったんですが、昭和二十七年に出来たばかりの東津野村公民館の職員になりました。その仕事の中で村史を作ることを村に提言したところ、「お前がやれ」ということになりました。素人ながら盲蛇に怖じずで、当時の県立図書館長の川村源七先生などに初步的なことから教わって、調査をはじめたことでした。村が組織した編纂委員会の委員さんたちも、地区別にいろいろな話を出してくれました。

こういう仕事は時間がかかるもので、村史の編纂は昭和二十年代には終わらずに、結局昭和三十九年に上巻を出して、四十年に下巻を出しました。

その初版も残部がなくなり、村史再発行の話が出てきました。「予算が無い、初版を焼き直して作ってくれ」

と言われましたが、「少しでもいいものを」との気持ちから藤村武男先生と一緒に加筆して昭和六十三年に再発行しました。と言うのも、初版時点では見つからなかった資料をその後随分集めていたからです。例えば、新たに手に入れた「日工集」（日用工夫集の略）によって義堂周信と絶海中津のところを書き改めました。

村の暮らしを調べる

村史の民俗編には、方言を集めて辞典のように五十音順に並べて掲載しました。方言は考えて出てくるものではありません。周りの人が使っているのを聞いたり、自分の口について出たものを「これも方言だ」と折々に収集するのです。そのため常にポケットの中にメモ帳を入れておくことが必要でした。

それと同じことが他の民俗行事なんかも言えます。どういう風にするものかはその場に行き当たらんことにはわからんことが多い。けれど、しているその場にはなかなか行き当たらん。だから行き当たったときには、しんどくても必ずメモる。これが肝心です。

暮らしのこまごましたことは、記録するという目的がなかったら案外見過ごしてしまうものです。茅普請に古茅を使ったことなど、今の人の考えでは

思いもつかんことでしょう。昔は茅を刈って各家で保存しておいて、毎年順番に何軒かずつ村人が協力して屋根を葺き替えていったが、囲炉裏の煙で燻べられた古茅は新しい茅より腐りにくくもちが良かった。だから葺き替えにも古茅を交ぜたわけですね。

村史には、今では聞けないような話もたくさん載せています。その中のひとつ、祖父から聞いた音平話の、「炭つけ馬」というこんな話がある。

音平は馬喰でね。「この馬は床鍋というところで、すみをつけよった馬じやが」と言うて、ある人に持ちかけた。「ほんなら買うてみようか」と買うてみたところが、だんだん馬の眉がはげできて白毛が見えてきた。それで、「音平め、人を騙して年寄り馬を売って。今度来たら、こじやんとだんつめぢやらないかん（相手をとつちめること）」と待ち構えちよった。床鍋は炭の生産地で、床鍋ですみをつけよったというたら、炭を運びよった馬かと思ふ。ところがそうではなくて、「床鍋ですみをつけよったと言うたらうがよ。眉墨をつけよったがよ」と音平。まだ、そのあとがあつて、「お前この前、金儲けの秘訣を教えてくれ言いよったが、今教えぢやあ」と音平。「その馬は何年か前にお前が飼いよった馬じや。お前さんのように気移りす

るようでは、無駄な銭を使うことにならあよ」言うて明かしたと（笑）。この話は、気変わりし易い主人をいませめた音平の知恵の話ですが、その時分、いろいろな行人商人が来ておったという実例でもあります。

村に刻まれた歴史

東津野村は、昔から伊予（愛媛県）との交流がありました。愛媛県とその県境の町村に点在する茶堂やら、愛媛県が本場の牛鬼やらが、東津野村にもあることが伊予の文化の流入を物語っています。

津野山の茶堂は孝山公（津野親忠）を祀っておるところが特徴です。津野親忠は、長宗我部元親の三男で、津野庄を領有する津野家に養子に入ったものの、慶長五年（一六〇〇）に弟によって自害に追い込まれた悲劇の武将です。藩政時代のはじめの頃、不作が続きましたが、それは弟盛親のために詰め腹切らされて無念の最後を遂げた親忠の祟りであるので、親忠の霊を慰めようということになりました。それが仏教思想と結びついて、茶堂を建て人々に布施することによって親忠公（孝山公）の霊を慰め、その功德によって五穀豊饒を願ったものですね。

津野氏の勢力の最盛期、津野之高は伊予の河野氏から養子にきたと伝えら

れています。この之高は、十七才の頃京都に出て詩を作り、五山の僧たちからやんやの喝采を貰ったというエピソードがあります。これは、津野氏の文化の優れた面の表れではないかと思えます。この津野氏の文化が津野庄に定着していた。五山文学の双璧と言われた禅僧、義堂・絶海も津野庄に生まれています。

その後、山内公が入ってきて、津野の遺臣が虐げられてゆく。宝暦五年には中平善之進らの津野山騒動がおき、幕藩体制に対する反感が地域の人々に浸透する。それが勤王思想と結び付いて維新の志士たちが輩出したと考えられます。死んだ人だけでも梶原が六名、東津野は四名、けれど吉村虎太郎がダブっているの合わせて九名。明治時代まで生きていた人を入れるとその倍以上にもなる。津野山にはそういう土壌があったわけですね。

漢詩の世界

詩文の才に恵まれた義堂と絶海のことを調べるうちに、漢詩がわからんといかんと思いました。漢詩を鑑賞するには、ただ文が読めるだけではいかん。作り方の基本を勉強しちよかんといかんと思ひ、古本を買ってきて一から勉強したことでした。

漢詩はパズルみたいなもので、基本

を知っておたらわかるものです。もちろん作ってこそわかるということもあります。長文を書き連ねるより一片の詩の方が、思ひの丈を伝えることもある。

維新の志士が作った漢詩も残っています。もつとも趣味の関係で、人によって多い少ないがあり、例えば坂本龍馬は作ってないようだが、吉村虎太郎は多い。それにしても大概の武士たちは嗜みとして漢詩の作法を身につけていたわけで、知的な遊びを楽しんでいたものだと思います。

昨年は間崎滄浪の書を龍馬記念館に依頼されて解説しましたが、学者であり勤王黨員でもあった滄浪の、語彙の豊富さには驚かされました。

郷土史とともに

私が、郷土の歴史に関心を持ったのは、小学校のときに『われらの郷土』という郷土読本ができたこと、それきっかけといえきっかけでした。

しかし、祖父がしてくれた話や、近くに住んでいた前田居記さんから伯父に当たる吉村虎太郎の話の聞いたりして、小さい頃から自然と歴史に興味を覚えたということもあります。

疑問に思ったことを調べてみたり、興味を覚えたことを探求する——その間にはしんどいこともあるが、原稿を書き上げたり、本を作ることに

は達成感があるでしょう。だから難儀なことがあっても途中でよう放らんわけですね。

私は郷土の歴史を充分に研究して伝えることが大切だと思います。その土地のその土地らしさをよく知ることでも人も村もつくられていくように思う。誰がそうとはまだはつきりとはわからんが、東津野村で私の後を継いで郷土の歴史を研究してくれる人もいろいろ育ってきております。

歴史館に期待すること

私は漢詩に関心があるので、企画展「維新の群像」を、たいへん興味深く見たことでした。

こうした企画展の他に、歴史館には、高知県の歴史研究のセンター的な役割を果たして欲しいと思います。郷土史の勉強のための基礎資料が歴史館に保存され、それらを活用できるようになればありがたい。

それから館蔵資料にかかわらず、高知県にある資料ならすべて、どこにあるかがわかるようなネットワークづくりをしてもらえるといいと思います。例えば、それらの資料がコンピュータに入力されていて自由に情報が引き出せるとか、個々の研究にも便宜をはかってもらえるようになることを期待しています。（文責 中村淳子）

◆新収蔵資料の紹介◆

大橋反求齋 書状

曾我 満子

一、此書は佐川の人々にはかつての土佐藩主を自宅へ迎えたという大橋の自慢話にもなるが、「いづれも心油断之ならぬ御客方にて、留主之時杯ハ、却而古着でも居られず、こまり物にて御坐候」とたびたびの来訪に内心困ったものだとしたためである。

この書簡が書かれたのは明治三年もしくは四年のことである。幕末期には一橋派大名の一人として、また大政奉還を将軍に進言し、小御所会議にて徳川慶喜を援護しようとして積極的に活躍した容堂であったが、維新後は議定・内閣事務局総督・刑法官知事などを任せられ、維新前と比べると閑職であったようである。大橋宅にしばしば立ち寄る余裕があったのであろう。それに比べて「三条公・岩倉公にも御先打ハあれ共、此御両公は御用繁故、未御出なし」とあり、三条実美、岩倉具視など新政府の首脳と大橋は交流があったようであるが、新政権を軌道にのせるため躍起になっていたこの二人はまだ、大橋宅には来たことがなかった。維新を境に新旧勢力の交代を感じさせる記述である。

(冒頭部分)

今春開かれた企画展「歴史と美術 維新の群像」を機に館に寄贈された資料の中から書状一点を紹介する。

大橋反求齋は佐川出身で、勤王の志士として活躍した大橋慎三の父である。この書状は明治になって息子慎三が東京に居を構え、反求齋がそこで見聞きしたことを郷里の人々に書き送ったものである。

この書状には明治維新直後の庶民の姿が描かれており、また、前土佐藩主山内容堂が文中に登場するという点で、大きく言ってこの二点を視点として鑑賞すると興味深い。

一つの視点、庶民の姿からみてみよう。舟運の要衝、柳橋界隈についての記述では、万八楼・壺益・亀清・川長等の料理屋に続いて並んだ生蕎麦・しるこ店などが繁盛している様子がわかる。料理屋というのは単に食事だけをする場所ではなく、今日という高級料亭であり、芸妓を宴席へはべらし、会合をする場所としての機能をもつところもあり、一種のサロンであった。山

内容堂もしばしば利用した場所であり、武士・商人・豪農・浪人なども出入りし、庶民には縁遠いところである。

この料理屋に対して江戸時代中ごろから蕎麦屋・天ぷら屋・鮎屋などの外食店や屋台が流行り、江戸っ子たちの胃袋を満たしていた。あちこちの神社を参詣して、茶店で休息という件もある。今日という喫茶店らしき店もよく利用されていたようだ。火事場見物も庶民の関心事であった。「火本を見二行しに、実二賑か成事、言語二述がたし。(中略)初メて大火ノ場所へ行キて、大二楽ミ申候」自宅への被害がなければまるでお祭り騒ぎである。

もう一つの視点、山内容堂についてであるが、この大橋宅へはしばしば訪れていたようである。御侍、御妾、御女中、芸妓を従えてやって来て、迎える側の大橋は酒肴を用意し、容堂との会話の中にも様々な気遣いを感じる。容堂は大橋が大歓待をしてくれるからこころが気に入ったらしく、「往来二屢々立寄べし。取ふいつも押かけぞよ」と言っている。大橋は「夫ハ大二迷惑仕り候」と返す。容堂「何もかまいなしにしてよけん」。大橋「夫なれハ、御成ハ平人之通り御扱仕るべし」。容堂「素夫でよろし」。このやりとりには本心が垣間見え、言葉での一種の駆け引きともいえ、読んでいてとても楽

しい。郷里佐川の人々にはかつての土佐藩主を自宅へ迎えたという大橋の自慢話にもなるが、「いづれも心油断之ならぬ御客方にて、留主之時杯ハ、却而古着でも居られず、こまり物にて御坐候」とたびたびの来訪に内心困ったものだとしたためである。

この書簡が書かれたのは明治三年もしくは四年のことである。幕末期には一橋派大名の一人として、また大政奉還を将軍に進言し、小御所会議にて徳川慶喜を援護しようとして積極的に活躍した容堂であったが、維新後は議定・内閣事務局総督・刑法官知事などを任せられ、維新前と比べると閑職であったようである。大橋宅にしばしば立ち寄る余裕があったのであろう。それに比べて「三条公・岩倉公にも御先打ハあれ共、此御両公は御用繁故、未御出なし」とあり、三条実美、岩倉具視など新政府の首脳と大橋は交流があったようであるが、新政権を軌道にのせるため躍起になっていたこの二人はまだ、大橋宅には来たことがなかった。維新を境に新旧勢力の交代を感じさせる記述である。

がらくり実演の夏



博物館の展示というとしても「静」のイメージがあると思います。

今回の「がらくり」展では、所蔵者の方々の御好意により、資料でもあるからくり人形を動かし、そのユニークな動きを楽しんでいただく実演を毎日二回（九月からは一回）ずつ行い好評を博しました。

実演を行ったのは、当館の学芸員のほか、共催の南国市から教育委員会の山中さん、商工水産課の浜田さん・合田さんたちでした。慣れないうちは頬が紅潮し、手が震えていた実演者の面々も、回を重ねていくうちにその腕を上げ、まるで館内に大道芸人がいるかのような盛り上がりを見せました。



で、地元南
国市の企業
・専門学校
から提供を
受けた最先
端の農業機
械や木琴演
奏ロボット
を見学し、
続いて一階

企画展示室において、茶運び人形などの座敷からくりの世界を堪能、最後に西洋のオートマタを御覧いただくというものでした。

期間中、特に人気があったのは、二階の木琴演奏ロボット（高知高専提供）と一階の段返り人形（峰崎氏・矢野氏所蔵）、そして弓曳童子（峰崎氏所蔵）でした。水銀の流動性と比重の重さを人形の重心移動に利用した段返り人形は、みる人をじらせるような動きがたまらなくキュートでしたし、矢をつかむ、引き寄せる、弓を引き絞る、矢を放つという四つの動作をいとも簡単にやっつてのける弓曳童子には、やんややんやの拍手喝采が沸き起こりました。また、長山財団提供のシンギングバードも女性を中心に関心が高かったようです。

実演をされていて一番嬉しかったのは、小さい子どもたちがからくり人形の動作一つ一つに釘付けになり、目を輝かせて「おもしろい」を連発してくれたことです。日頃一般のお客様の前に出ることの少ない私たちですが、本当にお客様の息遣いを感じることでできたあつい夏でした。

（野本）

博物館実習体験記

広島女学院大学4回生

谷本 聡美



大学の講義で常々、学芸員の仕事は幅広く奥が深い、と聞いていた。展示室で物静かに語りかけてくる資料の舞台裏はどうやらかなり忙しいらしい、と思っていたら、実習が始まると一日一日が過ぎていくのは本当にあつという間だった。現場に置いていただいて体を動かしてみてもその実感が迫り来た。

民具洗いやスケッチ、ビデオ・写真撮影、郷土玩具の修理といった実務的なことをはじめ、作文や図録発送の為の封筒詰めなどの事務的なことまで、それぞれの作業には知力、繊細さ、そして思いの他体力が必要だった。資料が展示される道のりにはいろんなドラマがくり広げられていた。また、からくり実演の補助についた時には来館者の方々の表情を身近に感じる事ができた。

人がいてモノがあって、そのモノをとり巻くいろんな種類（立場）の人がいる。館ではモノとの出会いを通じて、人との出会いがあった。博物館には様々なモノがあるが、職員・来館者・製作者・所蔵者…実に多くの人の心も集まり動いているのだということを感じた。今回の実習を体験して、博物館が宝物の詰まった「建物」ではなく「生き物」のように思われてきた。



歴民スポット⑱
子守りフゴ（民俗展示室）

山仕事の間、赤ん坊をフゴに入れ、木にかけていた状況を再現しています。来館者でよく見かけるのが、フゴの中の赤ん坊人形にびっくりして後ずさる方。また、近くに展示した山王の面を見て「鬼が赤ちゃんを食べちゃう」と、幼い女の子が泣いていたこともありました。リアルに作られたこの人形、実はフランス人形を日本人風に改造したものです。

（中村）

10～12月の催し物

〔企画展〕

10.30～1.17	昔のくらしと道具 —大津民具館の資料から—	高知市大津民具館の資料を通して、郊外農村の昔のくらしを探ります。
------------	--------------------------	----------------------------------

〔講座〕 午後2時～4時 聴講無料 葉書にてお申し込み下さい(定員100名まで。先着順)

11.21(土)	大津の民具について	梅野光興(当館学芸員)
----------	-----------	-------------

〔子ども歴史教室〕 *電話などで事前にお申し込み下さい。(親子連れ可・先着30名)

11.28(土)	土佐の民話 かみしばい	市原麟一郎氏
12.12(土)	もちつき	昔の師走の行事、もちつきを体験します。 エプロン、タオルをご持参下さい。

《次回企画展のお知らせ》

—土佐・郷土史の父—

てら いし まさ みち

寺石正路の足跡

2月11日(木)～3月28日(日)



土佐が生んだ偉大な郷土史家
寺石正路は、社会学・民俗学・
考古学など幅広い学識をもち、
多くの著作があります。

今回の企画展では、館に寄贈
された寺石コレクションを一挙
に公開します。

〔図書販売情報〕

研究紀要第七号

六〇〇円(送料一冊三二〇円)

室戸市羽根正法寺廃寺

「永享七年」銘の鰐口をめくって

岡本 桂典

〔調査報告〕

平成七年度資料調査員調査報告

釜調査報告集

室戸市

島村 泰吉

馬路村

橋本 雄幸

野市町

小松 亮

南国市

乾 常美

春野町

小川真喜子

土佐市

馬場 俊清

東津野村

上田 茂敏

十和村

蕨川 正重

西土佐村

岡本 貢

大方町

小橋 従道

中村市

西山 晴視

土佐清水市

榑原 敏文

土佐清水市

山下 竹光

三原村

下村 利彦

大月町

福吉 要吉

釜の形態と呼称について

—平成七年度資料調査員釜調査から—

中村 淳子

〔歴史館日録〕

月 日	出 来 事
七月十一～十六日	展示替のため臨時休館
七月十七日	特別展「からくり」開幕
七月二十五日	特別展講演会
七月二十九日	南国市子ども歴史教室(共催)
八月八日	子ども歴史教室「動くおもちゃをつくらう」
八月十三～二十日	博物館実習
八月十八～二十日	展示替のため臨時休館
八月二十一日	特別展「からくり」後期スタート
八月二十二日	特別展講演会
八月二十三日	特別展閉幕
九月二十四～三十日	展示替のため臨時休館

〈ひとこと〉

からくりが始まり、
からくりが終わった夏でした。

【お詫び】

特別展「からくり 夢と科学の世界」
解説図録一〇〇頁で、「連理返り」の所
蔵者を「東野コレクション」としていた
のは博物館「さかの入形の家」の間違い
でした。お詫びして訂正致します。

<p>岡豊風日(おこうふうじつ) 第29号 平成十年十月一日 編集・発行 高知県立歴史民俗資料館 〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-11 TEL 0888(62)2211 FAX 0888(62)2110</p> <p>開館時間 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)</p> <p>休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日) あたる場合は翌日) 12月28日 1月4日</p> <p>入館料 通常期「常設展」大人(18歳以上)400円 団体(20人以上)320円 高校生以下は無料</p> <p>療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳 ・障害者手帳所持者とその介護者(1名) 高知市および高知県長寿手帳所持者は無料 印刷・(南)西村謄写堂</p>
--